

井上靖

本覺坊遺文

ほんかくぼう いぶん
本覚坊遺文

いのうえ やし
井上 靖

© Yasushi Inoue 1984

1984年11月15日第1刷発行

1989年11月20日第9刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。(庫)

ISBN4-06-183383-9

井上靖

本覺坊遺文

千

利休の忠実な弟子、三井寺の本覚坊
の手記の形で語られる、利休の死の
意味。最高権力者秀吉との確執の中で、
乱世における佗茶のあり方を問い、賜死
を無言で受け入れた自刃によってそれを
完成した利休の精神を、ゆかりの、古田
織部、山上宗二等の茶人の死と共に描き
切った、日本文学大賞受賞の長編小説。



目次

終章	五章	四章	三章	二章	一章
解説					
年譜					

福田宏年・井口一男
高橋英夫

二二 二七 二八 二三 二八 四八

本ほん覚かく坊ぼう遺い文ぶん

現在、私の手許に、慶長、元和時代を生きた茶人が綴った手記がある。茶人というより茶湯者ちやのゆものといった方がぴったりするかも知れない。和綴五帖わとじ、いずれも和紙二十枚ほどをぎっしりと細字で埋めてあつて、独白体、日記体、メモ風、統一がないと言えば統一がないが、頗る自在な書き方をしている。

利休の弟子に三井寺の本覚坊なる者がいたが、あるいはその人物の手になるものではないかと思われる節がある。長く筐底きやうていに蔵していたが、今やそれを私流の文章に改め、輻湊している部分は整理し、足らざるところは補い、全篇に亘って多少の考証的説明も加え、一篇の現代風の手記として披露してみたい気持、切なるものがある。手記には題はないが、仮りに「本覚坊遺文」と題しておく。

一章

——三井寺の、三井寺の……

脊の方からそういうお声がかかった時、私は気付かない風を装って、そのまま歩み去ってしまおうと思いました。明らかに「三井寺の」までは口に出していらっしやいますが、名前の方はお忘れになっていらっしやる。それで多少歩度を早めて、そのまま足を運びましたが、再度お声がかかりました。

——三井寺の……

御高齢にも拘らず、すぐあとをついていらっしやるおみ脚の強いのに驚きました。すると、こんどは、

——三井寺の本覚坊とは違うか。本覚坊さんだろうが。

こうなると、失礼してそのまま歩み去ってしまうわけには参りません。立ち停まって六年振りの御挨拶となった次第でございます。本当にお懐かしゅうございました。もう八十歳になってな、と仰おつしや言いましたが、そうした御高齢にはお見受けできず、師利休在世時代と少しも変らぬ、紛れもない東陽坊さまでいらっしやいました。

——寄って行きなされ。

その一言で、もう無抵抗でございました。真如堂の紅葉を、これも何年かぶりで見たくなり、ふらふらと山門をくぐり、何程も行かないうちにお眼に留まる仕儀と相成ったものと思われます。

茶室に坐らせて頂いたのは未ノ刻（二時）頃かと存じますが、それからお庭の植込み、蹲踞がすっかり闇の中に取り込まれてしまうまで、本当に時間の経つのも忘れて、楽しい、やはり楽しいと申すべきでありましょう、そのような心足りた半日を過ごさせて頂きました。

尊円法親王の六字名号の紙表装のお軸、伊勢天目の茶碗、決して茶室に松籟の音を絶やすことがないという御自慢の炉。師利休在世の頃、一度師のお供でこの茶室に坐らせて頂いたことがあります、その時と何一つ変わっておらず、まさしく侘数寄者として知られた東陽坊さまのお茶席でございました。そこで結構なお点前のお茶を頂き、夢の中に居るような思いでございました。

それからまた、師利休が東陽坊さまにお贈りした今焼茶碗をお取り出しになって、私の前にお置き下さいました。お心のこもった御配慮、ただただ有難く忝く存じました。久々で師利休の前に坐っているような思いでございました。懐ろの広い薄造りの、黒釉の

美しい、何とも言えず上品なお茶碗を掌の上に載せたのは、何年ぶりのことでございましょう。作者長次郎が亡くなったのは、師利休他界の二年前、私は私なりにこの黒茶碗については多少の思い出も持っております。それがいまは東陽坊さまの御所持、嬉しいことでございます。

もう深更に及んでおります。真如堂南の、御隠棲後の御持坊の茶室を出、修学院在の己が住居に帰りまして、あとはずっと、今日思いがけずお目にかかつてお話を承ったり、お話を申し上げたりしたことを、あれこれ反芻^{はんすう}して自分独りの思いの中に入っております。申し上げるべきだったことで申し上げなかったこともありますし、お訊きしておくべきことで、お訊きしそびれたこともあります。またあのようにお答えしたが、本当はこうお答えすべきだった、それをどうしてあのようにお答えしてしまったのか、そういった思念の数々が今の私を取り巻いております。思いが千々に乱れるという言葉がありますが、今日あの茶室に坐らせて頂いた私は、久々で師利休とお親しかった方にお目にかかった心の昂^{たか}ぶりもあって、やはり思いは千々に乱れていたのでございましょう。

——若いのにどうして身を匿^{かく}してしまったのか。茶の道に入ったからには、茶で身を立てんことには、他に何の取得もなからうが。

こう東陽坊さまはおっしゃいました。まことにその通りでございます。私ももう四十代の半ば、決して若いとは言えませんが、それはそれとしまして、どうして身を匿してしまったのかという御質問に対しては、結局私はお答えできませんでした。師利休に殉じて茶の世界から足を洗ったというような、それほど筋道の通ったものでもございません。生来不敏、師に殉じるほど茶に携わった者としての心構えも、覚悟もできてはおりません。

私は三井寺の末寺に育ちましたが、三十一歳の時、ふとした縁から師利休のお傍に侍するようになり、それからずっと茶の湯の裏方のような役を勤めさせて頂き、かたわら師のお傍で直き直き茶の訓えも受けて参りましたが、四十歳の時、師のあの賜死事件を迎えました。そのようなわけで茶の修行をしたと申ししても、茶人とか茶湯者と言うにはまだまだ遠く、筋の通った茶事に顔を出したことも、そう多いとは言えません。それでも師の身辺のお世話をしたり、茶事の手伝いなどをしておりましたお蔭で、世の表舞台に立って綺羅星きらぼしのように輝いていらっしゃる方々からも、時には本覚坊とか、三井寺の本覚坊とか、親しくお声もかけて頂き、たまには茶事のお招きも受けたりして、何かと目をかけて頂いて参りました。

そうした私でございますが、それでも師晩年の茶事の一つに、ただ一人の客として迎えられたことがございました。終生の思い出であり、今振り返ってみましても、身も心も引

き締まるのを覚えます。

天正十八年九月二十三日朝。聚楽^{じゅらくだい}第屋敷の四畳半。師が死を賜る丁度半年前でござい
す。

古備前の花入に秋の野の花。

しりぶくら（尻膨）の茶入。

みしま（三島）茶碗を使い、よほう（四方）釜をかけ、ばけ物の水指という取り合
せ。

お振舞はめしに汁、それにごぼうくずにという一汁一菜。

菓子^{かし}はふのやきにやきぐり。

今考えますと師との名残りの茶事とでも言うほかなく、師が私のために設けて下さった
もの^{もの}としか思えません。一亭一客、心静かに、言葉少なに、私は師が点てて下さるお茶を
頂きました。

茶の道を修行したと口幅ったいことは言えませんが、それにしましても、まだ茶の方に
は知人もあれば、多少なりとも身に着けたものもあります。が、そこから離れては、東陽
坊さまが仰言る通り何の取得もございません。師利休亡きあとでも、生前師の門を叩いて
おられた方々にお継りすれば、分相応の己が踏み込んだ道の活かし方もあったかと思いま

す。実際にまたそのような声をかけて下さった方々もございました。

しかし、そうした御親切な申し出のすべてを辞退して、師のお屋敷の後始末が終ると、多少の縁故を頼って、修学院在に引込んでしまいました。別に生活の当てがあつて引込んだわけではありませんが、いざ引込んでみますと、よくしたもので、前々から昵懇^{じっこん}にしていた京の商家などから声がかかつて、道具の目利き、その売買の相談、そうしたことでして米塩の資に事欠くこともなく、今日まで過ごして来ております。

修学院の陋屋^{ろうおく}には茶屋と言えるほどのものではありませんが、自分独りだけが坐ることのできる一畳半の席を設けております。今もその自分の席に坐つて、初更からずっと独りの思いに揺られて、東陽坊さまとお話しているわけでございます。

——若いのにどうして身を匿してしまつたのか。

また東陽坊さまのお声が聞こえて参ります。あの時すぐお答えしたかったのですが、それができませんでした。今でもどうお答えしたらいいか、どう申し上げたらいいか、自分で自分の心のうちを、あれこれ手探っているような始末でございますが、こういうことがありましたと、ありのまま申し上げてみることに致しましょう。これがお答えになる、ならないは別にしまして、私の見た夢のお話でございます。

師利休があのような御最期をとげられてから二十日ほど経つた頃のこと、その時私は

郷里の近江に帰っておりまして。暁方見た夢でございます。

冷え枯れた磧かわらの道が一本続いておりました。余人の誰もが踏み込めようとは思われぬ、一木、一草とてない、長い長い小石の道でございます。その時私は山崎の妙喜庵を出てから、ずいぶん長い間、この道を歩いて来た、そのような思いに入っております。

が、そのうちに冥界めいかいの道というのはこのような道ではないか、それです。そして、このように魂の冷え上がる淋しい道がどこまでも続いているのであらうかと思ひました。昼とも、夜ともさだかならぬ、幽かな明るさが漂っております。

その時ふと気付いたのですが、私からかなり離れた前方を、もう一人の人間が歩いておられます。すぐ師利休だと気付きました。ああ、自分は師のお供をしてこの淋しい道を、冥界の道を歩いているのだと思ひました。

冥界の道であつたら、それはそれで宜しかつたと思ひます。ところが冥界の道ではなくて、その道がどうやら京の町に向かつていることを知りました。そうだ、いま自分は師のお供をして、聚楽第に向かつているのだと思ひました。誰もが踏み込めない冷え枯れた磧の道は、やがて京の都に入つて行くことでありましょう。それにしても、どうしてこのような冥界の道としか思われぬ道が京の町へ向かつているのか、それが解せぬ思ひでした。が、そうしている時、師利休は足を停めて、ゆつくりと私の方を振り向かれました。私

がまだ付き随って来ていることをお確かめになったような、そんなその時の感じでした。暫くすると、師はもう一度振り向かれました。こんどは、もうここから帰りなさい、そういうように私をお見詰めになりました。その時、私は素直に師のお氣持に副^そって、ここから引返そうと思いました。引返した方がよいと思いました。それで師の方に深く頭を下げました。師に対するお別れの御挨拶でございます。

ここで夢は覚めました。私は寢床の上に起き上がって端座し、いつまでも頭を垂れておりました。夢の中で師に向かって頭を下げましたが、夢から覚めたあとも、師に向かって頭を下げ続けておりました。

寧^むろ怖ろしさを感じたのは、夢から覚めてからでございます。冥界の道を歩くことはさほど怖くはありませんでしたが、その道が冥界ならぬ京の町のただ中を突切って、それから聚楽第の師のお屋敷まで続いていると思った時、——と申しますより、その冷え枯れた磧の道が、京の町のただ中を突切って聚楽第の中に入っている、そのことにどうして自分は今まで気付かなかったのかと思った時、瞬間、怖ろしさに魂を驚^{おどろ}かみにされてしまいました。自分などがうかうかと踏み込めるような、そのような容易な道ではない、そういう思いでした。